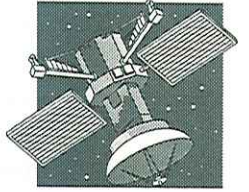




東大阪人工衛星プロジェクトは どこへ行くのか?



ご存じのとおり、本年1月23日午後0時54分、東大阪宇宙開発協同組合が製造した「まいど1号」を搭載したJAXAのH-IIAロケット15号機が、種子島宇宙センターから打上げに成功しました。東大阪のクリエーションコアでは、打ち上げの瞬間を見ようと多くの方々が集まりスクリーンを食い入るように見つめていました。

当社も長期間、東大阪宇宙開発協同組合の組合員の末席に名を連ねていました。(現在は脱会手続き中です。)

思い起こせば組合設立当初、資金援助が得られなく当時の青木理事長(株)アオキ代表取締役から依頼され、当社の会議室を無料で組合の事務所として数ヶ月間お貸ししたことがあります。連日夜遅くまで、時には徹夜をしてNEDOなど各方面提出する書類を作成されていたことが昨日のように思い出されます。

さて、「まいど1号」が成功したことが東大阪にとってどのような影響を与えるのでしょうか。結論から言えば、現状のままでは「打ち上げ花火一発成功!」で終わってしまう可能性が大きいと言えます。組合を設立した際に、その理念として『夢で始まり、情熱を結集し、こころ豊かな社会を創る』という言葉が掲げられました。

東大阪は、町工場が密集しており、若い人にとっては「夢」があまりにも無い町だと思います。この絶望感に似た雰囲気打破するために人工衛星プロジェクトが始まったと理解しています。

「人工衛星を作る」ことで、若者を町に定着させ、産業の活性化を図ることが目的でした。人工衛星を研究開発している間は、大学院生、大学生などの若い人たちが多く集まり必死で協力したと聞いています。しかし、プロジェクトが終わってしまうと元の静けさに戻ったように感じます。このまま終わってしまったらせっかく盛り上がりしてきた雰囲気が冷めてしまいます。

このようなプロジェクトは継続することが大事であり、継続してこそ、本当に「もの作り」を目指す若者が魅力を感じてくれる町になると思います。一旦中断すると技術が散逸し、次回立ち上げる時は、また一からの出直しになります。

現在、人工衛星のプロジェクトを継続させるために、様々な団体が活動していますが、実際に動き出すにはまだまだ時間がかかり実現可能かどうか解りません。本来ならば「まいど1号」を完成させた経験のある組合が中心となり更にステップアップした計画を実行して行かなければならないとは思いますが、組合の力不足は否めません。初代理事長の青木氏が、大阪大学大学院河崎善一郎教授と協同で「有限責任事業組合航空宇宙開発まいど」を設立されています。この事業組合にプロジェクトを是非継続して貰いたいと願っています。

いずれにしても、「まいど1号」の完成が東大阪を少しだけ明るくした。子供たちが宇宙に対して夢を抱いたことは間違いないと思います。人工衛星が、東大阪だけでなく、大阪の産業に成長することを願っております。

最後に、現在も地球を回っている「まいど1号」には、10センチ四方のステンレス製のプレート4枚が取り付けられています。プレートには組合員の会社名とロゴマーク、協力して頂いた各種団体の名称とロゴマーク、また人工衛星を作るために寄付して頂いたサポーター会員約2500人の名前が刻まれています。当社の名前とロゴマークも刻まれており、宇宙を回っています。少し夢のある話だと思いませんか。



(人工衛星に乗っているプレート)



新和商事 株式会社
代表取締役 森下喜郎

◆『夏山の雲に想うこと』

—その3—

今は殆ど登山をしていませんが、大学時代には体育会の山岳部でした。学部は工学部(現在は理工学部)でしたが、誰かに学部は?と聞かれると、『山岳部です』と答えて煙に巻くほどでした。

その頃はまだ海外の遠征が認められていなかった時代で、長野県の北アルプス、山梨県、長野県にまたがる南アルプスが主戦場でした。まだ黒部ダムの建設される前で、夏山での黒部の源流を遡った黒部平を這い上がる雲や、槍ヶ岳の北鎌尾根の積乱雲、冬の厳しい後立山連峰の縦走など、思い出は尽きません。冬の雪崩の怖さも忘れられませんが、夏の湧き上がった雲が発達しての目の前の落雷も恐怖の極致でした。しかし、冬の稜線に張ったテントに猛吹雪で一週間も閉じ込められ、たまたま移動してきた移動性高気圧で雲が切れ、地吹雪の中から這い出した青空に、『よし! 出発だ!』と奮い立ったときのことなどは忘れられない思い出です。

夏の高原で、下のほうから雲が高原に這い上がって沸いてくることがあります。

『いよいよ来るぞ』とその準備していると、音もなく(当然ですが...)湧き上がった雲に包まれてしまいます。数分前までは真夏の快晴にじりじりと焼かれ、遠くの太陽に反射した真っ白な積乱雲を眺める穏やかな夏山は、その途端、がらりと変わって気温が急激に下がり、風も出てあたりは薄暗い霧に包まれた世界に変わります。さっきまでの穏やかな世界はどこへ消えたのかと日本中が悪天候の中にあるような錯覚に襲われます。どう想像し

てもこれがこの雲の塊のなかだけという意識にはなれず、日本中が悪天候と感じてしまうのです。

このときに慌てて移動すると、まったく方向を間違えて正常なルートを逸脱し、場合によっては遭難という悲劇もままあることです。じっと、こらえて慌てることなく待つことが肝要です。

1時間も待って雲が移動して晴れてくると、今迄の荒れた真っ暗の世界が嘘のようにまた穏やかな夏の快晴の青空に戻ります。この雲の塊に入らなかった他の登山客にとっては想像も出来ない世界があったわけです。

皆さんもこれと同じような経験をお持ちでは有りませんか? 住宅街の朝、穏やかな暖かい朝なのに、一面の深い霧。交通機関も動けなくなるほどの視界不良。これが晴れると一面の青空が待ち受けていると知っていても、その場に居ると世界中が悪天候と錯覚してしまうほどの光景です。

我々のビジネスの世界でも同じような状況が屡々見受けられます。今の状況がこの雲の中と捉えることも重要なときがあります。雲の中で慌てるのではなく、雲の外にはまったく違った世界があることを忘れてしまうのです。雲の外に出れば明るい真夏の太陽が照りつける世界が繰り広がっていることを知り、慌てないことが大切でしょう。

今こそ大きな世界を、広い識見で、大所高所からの視点をもって凝視する訓練を痛感します。

《完》

(財)大阪科学技術センター
ATAC運営委員長 梶原孝生

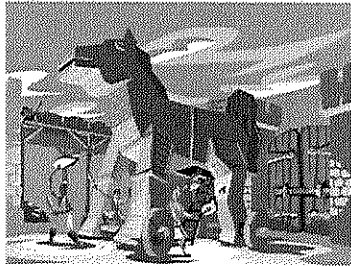
「トルコへ旅して」 <その1>

1. ロマンに魅せられて

火山活動で推積して溶岩や火山灰が長い年月をかけて侵食されて出来た奇岩郡、奇観のキノコ岩の連なるカッパドキア、一面が真白い石灰棚の温泉が広がる魅惑的な美しさを放っている「綿の城」、いわゆるパムッカレ。

ホメロスの叙情詩イーリアスに書かれた「トロイ戦争」の舞台として有名なトロイの木馬。これらのロマンに魅せられてトルコに旅をしてきました。

一度見てしまえば、「まあ、こんなものか」と、それほど期待した程の感動は受けなかった。が、それなりに良い観光ではあった。近年はバックミュージック付でこれらの観光地がハイビジョンテレビで映像化されているので期待があまりにも大きすぎたのかも知れない。



2. トルコの現状

第一次世界大戦後、国土が列強に分割されて17分の1に縮小した。現在のトルコ共和国は、かつてのオスマントルコ帝国の輝きはない。政教分離で近代ヨーロッパ法の採用により近代化に努めてはいるが、多民族で複雑な重層的混血と混住の歴史を繰り返してきたことによる複雑さ故の苦勞が多いと思われる。

第二次世界大戦後は、旧ソ連に南接するということで反共の防波堤として西側世界に迎えられNATOに加盟出来たが、最終目標のEUへの加盟は未だ出来ていない。99%がイスラム教徒であることが大きなネックになっているのではないかとと思われる。クルド問題、キプロス問題等々あろうが、いまだにビサンチン帝国と対峙した200年に渡る十字軍の戦いのDNAが西側諸国に残っているのかも知れない。西側ヨーロッパの国益中心の外交、厳しい世界情勢の中で生き抜きを図る強かな外交を見せられた。日本の外交とはチト違う。

イランやイラクやアフガニスタンを舞台とした、イスラム原理主義者の動きが報道され、イスラム教は暴力的で怖いものだとの認識する者が多数であるが、トルコで見たイスラム教徒である町の人々からはまるで違う宗教心の篤い、優れた温かみのある民族ではないかと感じた。

ホームレスは1人も居ないようだ。日本よりはるかに貧しい国であるがモスクが食と住については面倒をみているようだ。

イスラム教で言う信者たちからの「喜捨」によるものだ。

日本のお寺さん、宗教家は忘れてしまったのかな？

(有) エス・ブイ総合研究所 山口義彦

ンプルに中華料理を囲んで、テーブルをみんなで回して、話をして過ごす会でした。私はそんなスタイルが彼女に合っているように思え、新しい家族の温かさを感じられ、また私自身も楽しく過ごせて、とても充実した時間を過ごせました。

このパーティーでまた一層私は台湾が大好きになりました。

(完)

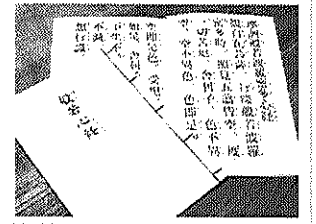
石田 千代



VECレポーターが行く!!

ホテルで写経・・・都心で「空」を感動!!

最近、女性の中で静かなブームの「写経」という言葉をよく耳にする。私自身も数回「般若心経」を写経した経験はあるが基本的なことはよく知らない。そこで、「写経」について私なりに調べているうち「ホテルで過す写経のひとつ」という言葉が目にとまった。



早速、参加希望し開催場所はリーガロイヤルホテル・クラウンルーム。講師は薬師寺・村上執事長、参加者は全員で約100名位（大半は女性）でやはり人気をうかがえるなど思いつつ時間どおりに始まった。般若心経の知識、お写経の意義などを教えて頂き写経を開始。大勢にもかかわらず静寂さの中で皆さん一心に、筆をすすめていく。最後の行に「為」という文字の下に自分の願い事を書くことから写経のはじまりと教えて頂き、その後一文字、一文字書くことで気持ちを静め書き終えた。しかし、一つのことになんか精神が集中したのは久々で時間が短く感じられるのが不思議であった。お写経は般若心経の「空の心」の世界である。空とは「かたよらないところ こだわらないところ とらわれないところ ひろく ひろく もっとひろく これが般若心経 空のころなり」と功德が説かれており、私自身日々見えない「感性」というものを自然に感じたような気がした。

写経が終了した後は村上執事長のお話があり、その日の写経は奈良、薬師寺に納経し永代供養していただけるそうである。

普段あまり感じたことのない隣とした気持ちを大切に個人でも引続き一巻、一巻写経しようかと思う。又、この様な機会があれば是非とも参加したいし皆様も「空」の世界を体験してみませんか。

VECレポーター 濱本

◆ 台湾の結婚式に行ってきました!!

日本の披露宴では、新郎新婦の家族が一番遠い席についていたりするものですが、台湾では、主役の2人を、お互いのそれぞれの家族が包むように同じ円卓を取り囲んで一緒に食事をしていました。その姿から、台湾の人々が、家族を大切にしている様子を強く感じ取れました。

新郎のおばあさんたちがいて、お互いの両親がいて、姉たちや甥っ子姪っ子に囲まれて言葉は通じない中でも楽しく笑いながら同じ中華テーブルを回しながら食事をとっている彼女を見た時、あの子はこうやって新しい家族の一員としてやっていくんだなあとしみじみ感じてしまいました。

それが私の目にはとても温かいものに映りました。その後、お互いの両親と一緒に立って乾杯をし（お酒があまり飲めないため甘い麦茶で執り行われたらしいですが）、各食卓を2人と一緒に両親ともどもで挨拶して回り、食事と歓談が続きました。あとは、日本と同じようにブーケトスがあり、新郎新婦が退場し、出口でキャンディーを配るという流れで終了。

日本の結婚式や披露宴で行うような感動を呼ぶ演出や誓いのキス、新郎新婦からの挨拶やご両親からの挨拶もなく、シ

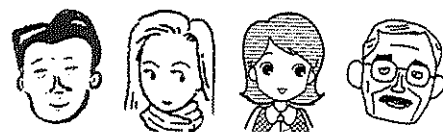
～VEC関西より～

◆ 相変わらず、魅力ある記事、ご協力有難うございました。今月号は森下さんの“まいど一号”のお話。何とか二号三号と続けて欲しい物です。また、梶原さんの山のお話。私も山登りは趣味ですが、何とかこの暗雲、早く飛び散って欲しいものです。山口さんトルコのお話、続きが楽しみです。石田さん、濱本さんよかったですよ。(本田)

♥ トロイの木馬、実際に見ることが出来たら、あの映画の場面が目には浮かぶ事でしょうね。羨ましい限りです。(藤本)

♣ 4月は新入社員、新入学など新しいスタートの時期です。VEC関西のスタッフとして新しい企画やテーマに挑戦して少しでも皆様のお役に立ちたいと思っております。引続きご協力よろしくお願ひ申し上げます。(澤村)

◆ 〈交流会予定〉
5月21日(木) ストラテジック・デザイン・イニシアティブ(株)
森辺 社長 様



☎:06-6263-0366